

学校教育目標		「つながり」を大切に、自ら未来を切り拓いていく生徒の育成 ・自ら学び行動する ・思いやりの心をもつ ・体力づくりに励む				総合評価
運営方針		「小中一貫教育(キャリア教育)を通して 学力向上(ICT活用)と規範意識の高揚をめざして」 キャリア教育→つなげる力・みつめる力・やりきる力・みとおす力				
令和3年度の成果と課題		本年度の重点目標				
[成果] ・教職員や生徒会による挨拶への取組は効果が上がっている。 ・教職員間の連絡や協議ができており、組織的に生徒指導ができています。 ・クロムブックを活用した授業が進んでいる。 [課題] ・小中連携に向けた取組を充実させる。 ・コロナ禍における職場体験や児童生徒の交流の仕方を検討する。	○家庭学習の習慣づけ				知	B
	○ICT機器を用いた学力向上					
	○読書活動の推進					
	○規範意識の向上				徳	
	○思いやりの心の育成					
	○ふるさと学習の充実				体	
	○基礎体力の向上					
○発達に応じた保健指導による生活習慣の確立						
○生徒理解による個別支援の充実						
評価項目	具体的目標(評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
知	家庭学習の習慣づけ	「家庭学習の手引き」を参考にしながら、日々の学習計画を作成する。その計画をもとに日々の学習に取り組む。教職員と生徒が互いにフィードバックを行う。	B	家庭での学習時間が少しずつ増加していると考えられる。しかし、依然として家庭での学習時間が1時間未満の生徒が多い(51.4%)ため、ICTの活用など家庭学習を習慣づける手立てを家庭と連携しながら行っていく必要がある。	「家庭学習の手引き」の見直し及び家庭学習でのAIドリル活用の定着をはかる。	AIドリルの導入という新しい取り組みによって、生徒の自主学習及び家庭学習時間の増加につながっており、学力向上に期待したい。生徒の読書状況をわかりやすく数値化することは、読書活動の推進に効果的である。保護者等に取り組み状況を開示し協働を求めることが大切である。
	ICT機器を用いた学力向上	各教科の学習や指導において、ICT機器を適切な場面で効果的に活用する。	B	GoogleWorkspaceの活用は各教科で少しずつ進捗している。AIドリルの導入は低学力層の生徒の家庭学習時間の増加に効果があった。教員の活用は少数であるが朝学習での全体活用が定着した。	AIドリルに取り組む時間を毎日時間割上に位置づけ学習の習慣化を図る。教科担当が課題のコントロールを行う等効果的な活用を行う。	
	読書活動の推進	学校図書館を中心として生徒と本をつなぐ取組を行う。授業においてICTと併用し、図書を積極的に活用する。主体的・対話的で深い学びの視点から、個々の関心に合わせた幅広い図書を市図書館と連携して提供する。朝学習の時間に図書館開放を行う。不読率を10%以下、月の平均読書量3冊以上を目指す。	B	学校図書館の貸出冊数は昨年度比136%(1826冊 1月末現在)であった。学期ごとの読書アンケートで生徒の読書状況は不読率は平均27.5%、月間平均読書量2.8冊である。計画した方策については全て実施でき、さらに主体的な学びが期待できる「調べ学習コンクール」にも市図書館の協力も得て実施。学年や生徒によって不読率に極端な差が出ていること、学期を追うごとに読書量が低下することが課題である。	今年度の方策を継続して実施。3年生にも図書館の活用を行った授業の展開の提案。総合的な学習の時間を利用して全校体制で「調べる学習コンクール」にも引き続き取り組んでいく。	
徳	規範意識の向上	あいさつの励行(教職員が登校時に立哨を行い指導する。定期的に、生徒会のあいさつ運動を行う。)	A	教職員による立哨や生徒会によるあいさつ運動を計画通り実施することができた。通学路での立哨についても、必要に応じて実施することができた。生徒・保護者・教員アンケートでは3者ともに、学校のきまりや交通ルールを遵守し、安心・安全な学校生活を送ることができたと90%以上が回答した。	あいさつの励行を引き続き実施。安心・安全な学校生活を送ることができるよう、日々、ルールの遵守やマナー向上を促していくように取り組む。	あいさつの励行を続けることは、思いやりの心の育成や規範意識の向上の第一歩になるため今後も継続を願う。ふるさと学習の充実のためには、地域との連携・協働が必要である。そのためには教員・生徒のコミュニケーション能力の向上が不可欠である。ふるさと五條を誇りに思えるよう取り組みの充実を期待している。
	思いやりの心の育成	道徳教育を推進し、考え・議論する道徳の授業の展開を行う。また、豊かな体験活動による協調性・協働性の育成を行うとともに、縦割り活動の充実にも努める。	B	道徳の時間等を通じて、友達を思いやる心をしっかりと育むことができた。ただし、考え・議論する道徳の授業の計画的実施(教員42.9%)は不十分であった。体験活動をコロナ前に近い形で実施することができ、生徒たちの協調性・協働性の育成を積極的に進めることができた。	道徳教育の研修・討議を行い、道徳の授業内容をさらに充実させる。	
	ふるさと学習の充実	小中一貫した9年間の体系的なふるさと学習を推進し、生徒に地域との繋がりを実感させる。地域の魅力を発信する活動を通して、自分の住む地域を誇りに思える生徒80%を目指す。	B	五條市を中心とした校外学習や職場体験を実施することができたが、アンケートの結果より「ふるさと五條を誇りに思う」に対して肯定的な回答をした生徒は69.2%と目標を下回る結果となった。地域を理解し郷土意識を高める取組の充実が必要である。	ふるさと五條について様々な角度から課題を設定し、探求的な学習を進めることで五條について学び、郷土意識を高める。	
体	基礎体力の向上	授業を通して、体力向上の意義について理解させ運動することへの関心をもたせる。授業や部活動で体力トレーニングを取り入れ体力向上に努める。新体力テストで全国平均を超えることを目指す。	B	今年度の新体力テストで全国平均を超えた種目は28/48であった。半分以上全国平均を超えることができた。しかし全国平均を超えた28種目のうち、男子生徒が平均を超えたのが9種目で、男子の体力低下が課題である。	体力を向上させるために、運動部活動に入学していない生徒への運動指導を、保健指導などを通して行っていく。	基礎体力の低下が気になる。数年前までは、2年生になると全国平均を上回る種目がほとんどだったとの報告があった。生徒の減少に伴う運動部活動での活動の低下、家庭でのSNS・ゲーム機器利用の増加など外遊びの減少も要因と考えられ、運動することの重要性を生徒に考えさせる必要がある。生徒理解のための教師間での情報共有ができていない。今後さらに、教育相談体制を構築していけるように望む。
	発達に応じた保健指導による生活習慣の確立	心身の健康づくりの基盤となる生活習慣の確立に向け、家庭との連携を進め、生活アンケート「すこやかチェック」や保健指導から生活習慣確立の大切さに気づかせ、自らの課題を見つけよう生活が実践できるよう努めさせる。	B	週1回すこやかチェックを実施し、生活を振り返る機会をもつことができた。健康に過ごすために気をつけている生徒は66.4%だが、インターネットの使用時間についての意識は低かった。すこやかチェックや保健便りを参考に生活習慣の定着に向け、担任より朝の会等で話す機会をもつことができた。(教員86.8%)	タイムマネジメントの必要性を伝え、考える機会をもっていく。	
	生徒理解による個別支援の充実	SCやSSWを活用し、個別のケースに対しては、必要に応じてケース会議を行う。また、職員間で情報共有を密に行い、一人ひとりの生徒にあった対応を心がける。	B	職員間で情報共有を十分に行い、SCや関係機関とも連携し、組織的に個々への適切な対応を行うことができた。手立てや生徒理解についての研修を重ね、対応の中で活かすことができたが、計画的・系統的に研修していく必要がある。	支援や手立てについての研修を重ね、教育相談体制をより充実させていく。アセスメントシートを活用し、情報共有が円滑にできるようにする。	
学校運営	学園構想に基づいた小中一貫教育の推進	来年度の小中一貫教育の全面実施に向け、グランドデザイン・キャリア教育年間指導計画・東部学園キャリアパスポート等を作成する。また、先行実施の具体的な実践として、児童生徒合同の「挨拶運動」「ボランティア活動」「オリジナルキャラクター作成」を行う。	A	計画した取組はすべて達成することができた。グランドデザイン等の作成により、東部学園としての方針を職員に共有することができた。また、3校合同の具体的な実践により児童・生徒にも意識付けすることができた。来年度は、小中の交流を増やし東部学園としての教育を進めていく。	「五條東部学園キャリア教育講演会」を実施し、本年度よりも大きな規模での交流を図る。また、小中の教員が各校を相互に行き来し、校務を横断した互いの良さを活かせる教育を実施する。	小中一貫教育を行うための小中の合同研修会や合同会議での教師間交流を積極的に進めている。来年度は計画をもとにしっかり進めていくことを望む。ICTの効率的な運用のために外部人材の活用も検討してはどうか。
	業務の効率化による働き方改革の推進	校務支援システム等のICT環境を整備し、業務の効率化を図る。また、学校行事の計画・準備のすずめ方について改善を行う。加えて、勤務時間を明確にし、施錠時間を設定することで意識改革を行う。	C	教員アンケートで業務については67.8%、学校行事の計画・準備のすずめ方については63.6%の教員が効率化・改善されたと回答するにとどまった。勤務時間の明確化・施錠目標時間の設定を行ったが、超過勤務の改善には至らなかった。	本年度の方策を継続するとともに、校務支援システム及びICT活用の研修を行う。	
今年度の成果と次年度への課題		[成果] ・ICT機器の活用、AIドリルの導入及び学校図書館を中心とした読書活動により、学力向上を図る手立てを行うことができた。 ・生徒の規範意識の向上及び思いやりの心の育成は、それぞれの具体的な方策の実施により目標値を達成できた。 ・職員間での情報共有を密に行い、SCや関係機関とも連携し組織的な対応を行い、生徒理解による個別支援の充実を図ることができた。 ・2小学校と連携して、小中一貫教育の推進の基盤となる計画・組織体制づくり、研修を行うことができた。		[課題] ・生徒の学力の正確な分析を行い、目標設定・具体的方策をすすめる、学力向上を図っていく必要がある。 ・小中一貫教育の全面実施にともない、さらに小学校と連携して具体的な実践を進めていく。 ・教科指導、生徒指導及び教育相談の組織的な体制を強化するとともに、個々の職員の力量を高めていく。 ・業務の効率化をさらにすすめる働き方改革を推進し、超過勤務を改善する。		